

星の糞遺跡



奈良時代の住居跡

よみ ほしのくそいせき

指定 市指定史跡

面積 823m²

所在地 御前崎市白羽

所有者 個人

指定日 昭和44年6月25日



現在の星の糞遺跡

縄文時代前期の出土石器

解説

星の糞遺跡は、御前崎市白羽の鳥居原に存在しており、御前崎中学校の西南の第三丘陵である御前崎台地北縁の舌状台地上に立地しています。昭和のはじめ頃に白羽神社前宮司の高山建吉氏が発見し、昭和2年に『考古学雑誌』に報告され、また足立鍬太郎氏が昭和5年に刊行された『静岡県史』第1巻の中で報告したため、早くから県内の考古学会で注目されていました。

そして、昭和52年(1977)8月に茶畑の改植に伴い、文化庁や静岡県教育委員会文化課の指導を得て、旧御前崎町教育委員会が中心となり、当時、京都平安博物館の助教授であった渡辺誠氏を調査担当者として、旧御前崎町では初めてとなる本格的な発掘調査が実施されました。

その結果、奈良時代の住居跡2棟と縄文時代の大型土坑1基、奈良時代の煮鰹魚の生産用具と考えられる大型埴をはじめとする奈良時代の遺物や、縄文時代前期(約6,000年～5,000年前)を主体とする縄文土器とともに、4,500点以上に及ぶ縄文時代前期の多量の石器が出土しました。

星の糞遺跡は、縄文時代前期の関東系と関西系の土器編年の対比ができる貴重な遺跡であり、東西文化の接点として重要な意味をもつことから、東海地方東部の縄文時代前期を代表する遺跡のひとつと言えます。